

パリから見えるこの世界

Un regard de Paris sur ce monde

第3回 モンペリエの生気論者ポール・ジョゼフ・バルテ、あるいは過去が漂う世界

「自然に対して親への感情や同情の感情を抱く学者は、自然現象を奇妙で異質なものと見做さない。

寧ろ、ごく自然に生命と魂と意味をそこに見出す。このような人は基本的に生気論者である」

(ジョルジュ・カンギレム)



モンペリエ第1大学医学部正門

二人のモンペリエ医学の祖が迎えてくれる

右は内科学のポール・ジョゼフ・バルテ、左は外科学のフランソワ・ド・ラペイロニ

2010年6月、モンペリエ第1大学（Université Montpellier 1）で開かれる「医学における人文・社会科学会議」（Congrès 2010 des Sciences Humaines et Sociales en Médecine）に参加するため、パリ・リヨン駅から3時間半ほどの旅に出た。参加の主目的は医学に対して人文科学、社会科学からどのようなアプローチがされているのかについての感触を得ることだが、もう一つセンチメンタルな理由があった。まだフランスに目覚めていなかった20年ほど前、モンペリエから車で30分ほどのところにある地中海に面したラ・グランド・モット（La Grande-Motte）で会議があり、その帰りにこの町を訪れたことがあったからである。到着後、記憶の奥に仕舞い込まれた街を解きほぐすべく早速散策に出た。旧市街は記憶に残っていたところほど広くない。ペイルー公園、

凱旋門、コメディイ広場、そして前回入ったリブレリーなどが現れると、20年という歳月が一瞬のうちに消え去り、残念ながらセンチメンタルジャーニーとはならなかった。会場となるモンペリエ第1大学医学部に着くと、正面玄関でモンペリエ医学の基礎を築いた内科学のポール・ジョゼフ・バルテ (Paul-Joseph Barthez, 1734-1806) と外科学のフランソワ・ド・ラペイロニ (François de Lapeyronie, 1678-1747) が迎えてくれた。しかし、そのことがわかったのは会議初日が終わってからであった。

モンペリエ第1大学は、1289年にローマ教皇ニコラウス4世の大勅書により創設された。12世紀のパリ大学、13世紀前半にできたトゥールーズ大学に次ぐフランスで3番目に古い大学で、医学部は世界最古を誇っている。この医学部で学んだ人の中には、ルネサンス期の占星術師ノストラダムス (Nostradamus, 1503-1566)、同じくルネサンスのユマニスト作家のフランソワ・ラブレール (François Rabelais, 1483?-1553)、南方熊楠 (1867-1941) も目標にしたというスイスの博物学者コンラート・ゲスナー (Conrad Gesner, 1516-1565) などがいる。2009年にはモンペリエにある3つの大学を中心として周辺の研究施設、大学、病院などが統合され、南フランス・モンペリエ大学 (Université Montpellier Sud de France : UMSF) となっている。



理事会室のポール・ジョゼフ・バルテ

会議初日のプログラムに大学の見学があった。5,000点以上の資料があると言われる解剖学博物館の天井にはアリストテレス (384 BC-322 BC)、アンブロワーズ・パレ (Ambroise Paré, 1510-1590)、アンドレアス・ヴェサリウス (Andreas Vesalius, 1514-1564)、

ジョヴァンニ・モルガーニ (Giovanni Morgagni, 1682-1771)、ビシャ (Xavier Bichat, 1771-1802)、ジョルジュ・キュヴィエ (Georges Cuvier, 1769-1832) などの肖像画が描かれていて、なぜか懐かしさの中にたゆたうような感覚が訪れる。そして理事会室に入った時、壁一面に飾られた肖像画の説明の中に遠い記憶を刺激する音を聞き取った。・・・「ヴィタリズム」・・・。モンペリエの医学と言えば生氣論というぼんやりとした結び付きが頭のどこかにあったからだ。そして案内の方が指し示す先には、ポール・ジョゼフ・バルテの肖像があった。バルテは1734年、モンペリエに生れ、20歳にしてモンペリエ大学医学部を卒業してパリに向かう。1759年、25歳の時に母校に職を得て以降、教育における才を如何なく発揮し、大学の評判を高める。モンペリエ大学医学部では、事実の観察とその哲学的解釈の二つを基礎に据えていたが、その中心にいたのがバルテであった。この大学には古代ギリシャのヒポクラテス (Hippocrates, 460 BC-370 BC) が生きている。それは言葉だけではなく、廊下の脇にヒポクラテスの像が置かれ、講堂正面には「その昔コスにいたヒポクラテスは、今モンペリエにいる」 (*Olim cōs nunc monspeliensis Hippocrates*) と1795年に刻まれたプレートが掲げられていたりするからである。学内を歩いている時、ヒポクラテスの魂がそのあたりに漂い、恰も古代ギリシャと今が溶け合っているように感じられた。

エーゲ海に浮かぶコス島に生れたヒポクラテスは、学び、実践し、旅し、教え、書き、そして人間の尊厳を守るための科学としての医学を築き上げた。その中で、人体の部分や知性とは別に、全身の変化としての病気を元に戻す生命力、すなわち「自然治癒力」 (*vis medicatrix naturae*) があると考えていた。バルテはモンペリエで教えるようになる。フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) の帰納法と常識学派のトマス・リード (Thomas Reid, 1710-1796) の認識論を取り入れ、あくまでも個々の現象の観察や経験から考察を始め、そこから原理の抽出に向かうという方法を採用した。そして、1778年の著作「人間科学の新たな要素」 (*Nouveaux éléments de la science de l'homme*) において、人間を構成する三大要素として、物質的なもの、意志と意識に関わる精神、ヒポクラテスの生命力を発展させた「生命原理」 (*le principe vital*) という新たな概念を導入し、生命全体を一つの纏まりとして捉える学説を提唱した。

この哲学は、生命現象を物理化学的な原理に還元する物理主義や還元主義の流れだけではなく、無意識における活動についても精神の関与を認めるアニミズムの流れとも決別するもので、生命活動の統一性、心身の統合を目指すものであった。また、ガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei, 1564-1642) の物理学が宇宙と人間を分離したのに対し、

バルテは人間を環境の中に置き直し、環境と相互に反応し合う存在として人間を捉える「関係の医学哲学」を構築したのである。極めて現代的な響きを持つ哲学ではないだろうか。これがモンペリエの生氣論として1世紀に亘りヨーロッパに広がることになる。しかし、18世紀から19世紀に入り新しい実験方法の導入による発見が相次ぐようになると、生命現象を説明するために彼が導入した「生命原理」の存在基盤が薄弱になる。さらに、病気も全身ではなく局所に由来するものとされ、その場として細胞が登場する。このような背景の中、彼の考えは次第に忘れ去られるようになり、特に外国ではその傾向が著しかったのかもしれない。フランス語版ウィキペディアの《**Vitalisme**》では **Barthez** の名は取り上げられているが、日本語版の「生氣論」、英語版の“**Vitalism**”、ドイツ語版の„**Vitalismus**”にその名はなかった。

21世紀に入った今、これまでの科学や医学を推進してきた還元主義や物理主義にいろいろな弊害が指摘されるようになってきている。18世紀に生きたバルテを始めとする生氣論者が人間全体を一つの生命体として見ようとした試みをここで振り返ることに意味はないだろうか。科学における理論は後に否定されたためにあると言っても過言ではない。それが科学という営みの本質だからである。問題は、否定された仮説や理論を恰も断罪されたものであるかのようにいとも簡単に捨て去り、忘れていくということである。その時代において過去人が問題解決のために行った思索の跡まで消し去ることは、現在に「今」の存在しかないという著しく貧しい精神世界を齎すことになるのではないだろうか。この現在を豊かなものにするためには、過去人の営みの跡を正確に蘇らせ、その意味を現在との関係で考え直す必要があるだろう。この役割を医療や研究の忙しい現場に関わっている方が担うのは大変である。歴史家や哲学者が担わなければならない役割のはずである。そこで重要になるのは、その研究成果を内輪に留めたままにするのではなく、医療や研究の場を含めて広く語りかけることではないだろうか。これこそ、バルテが考えた「関係の哲学」のエッセンスそのものに見える。さらに言えば、このような営みは「今・ここ」だけを追い掛けている現代のあらゆる領域で求められるだろう。もし、この過程がうまく行けば、われわれの生きている空間に過去人の営みが漂う重層的で奥行きのある世界が展開するのではないだろうか。

そんな瞑想をしていたある日のこと、とあるリブリーで「生氣論を再考する」(*Repenser le vitalisme*, Presses universitaires de France, 2011)という本が目に入ってきた。タイトルの通り、これまでに生氣論を唱えてきた人たちの営みの跡が解析されている。そして、その編者を見た時、不思議な繋がりを感じていた。その方はモンペリエの会

議でお会いしたモンペリエ第 3 大学ポール・ヴァレリー (Université Paul-Valéry Montpellier 3) のパスカル・ヌヴェル (Pascal Nouvel) 教授だったからである。彼はモンペリエに赴任する前、現在わたしが所属している大学で教鞭を取られていたこともあり、親しくお話をさせていただいた。今、南仏の太陽と抜けるような空を思い出しながら生気論者たちの精神の光跡を味わっている。



ポール・ヴァレリー美術館から
「海辺の墓地」と霧に霞む地中海を望む

ところで、モンペリエの会議終了後、ポール・ヴァレリー (Paul Valéry, 1871-1945) が生れた地中海の港町セット (Sète) を訪問する機会があった。わたしは新しいところを訪れる時、予習をしないことにしている。予習して出掛ける場合、その場で勉強の成果を確認することになり面白味が激減するのに対し、白紙の場合にはすべてが自分の発見のように感じられ、新鮮な経験として残るからかもしれない。その日も散策中に貴重な出来事に遭遇した。一つは、フランス、ドイツ、スイスでしか行われていないというジョスト (Les Joutes)。この競技は沖縄ハーリーの爬竜船を思わせる小舟の先頭に立った騎士同士の一騎打ちで、古代からの勇壮な戦いを想起させるものであった。もう一つは、ポール・ヴァレリー美術館で開催されていた放浪の画家ラウル・デュフィ (Raoul Dufy, 1877-1953) の特別展「地中海のデュフィ」である。会場に向かうべく坂道を上ると、「風立ちぬ、いざ生きめやも」(Le vent se lève !... Il faut tenter de vivre !) の「海辺の墓地」(Le Cimetière marin, 1920) が現れ、感激する。美術館では叩きつけるような驟雨の音を聞きながらすべての作品を観終わった後、グラスリーに落ち着きワインとともに目の前に広がる「海辺の墓地」と雨上がりの地中海を味わう。予想もなかった展開が続いたためか満ち足りた気分が訪れ、完全に景色の中に溶け込んで

いた。そしてマスターに礼を言って立ち去ろうとした時、こんな声が聞こえ我に返った。「ムッシュー、勘定がまだ終わっていませんが・・・」

(2012年3月2日)